

〈第十一話〉

板付観音物語

川内村と田村郡との境に海拔三千七百余尺の高峯がそびえています。大滝根山おおいねさんといい、山上には峯みね靈神社が古くからまつられ、阿武隈の山系やまなみの中で一番高いこの山は山嶽信仰の靈場でもありました。

春は全山石楠花しきくみけの花に覆われ、秋はだうだんつつじが美しい色どりに包まれているこの山の南の中腹に大きな岩窟いわあながあって、達谷窟たつやのくつ、又は鬼穴と呼ばれていました。

「むかしなあ。鬼穴というところに悪路王わるものという悪者のあやぶんがいてこの地方を荒しまわっていたんだと。

ところが坂上田村麻呂うへむらササユリという偉いたいしょうが討伐に来て、標葉の郡司やまたとさまの館やまたとに宿とまっかって長沢ひがくれやまから日隠山の道みちを毛戸もうとに向つて進んだんだそうな。山田の観音様もその時田村麻呂が建てたもんだし、飛付観音様も、あそこに田村麻呂の軍が露営ろえいしたときに建てたんだと。うそだと思つたら行つてみな、観音様の後ろの崖がけに田村麻呂の乗つた馬の蹄跡つめあとがあるから。」

今でも里の古老は、まことしやかにいうのです。